



企画にあたって

大郷 剛

(国立循環器病研究センター心臓血管内科部門・肺循環科特任部長 /
医療安全管理部部長)

肺高血圧症は肺動脈圧の上昇により右心不全をきたす希少難病であり、約25年前までは現実的に使用可能な有効な治療法はなく、まさに「不治の病」でした。しかし、この25年の間にプロスタサイクリン経路、エンドセリン経路、nitric oxide 経路の3系統の肺動脈性肺高血圧症（PAH）治療薬が登場し、運動耐容能や生命予後は大きく改善してきました。しかし、現在使用可能な薬剤をもってしても十分な病状の改善が得られない場合もあり、また、いまだに根治はできず、「不治の病」であることは変わりありません。重症例への治療、現行の治療薬への不応例、心肺病変や静脈病変の合併した病態などさまざまな病態が明らかになり、この疾患の unmet ニーズは多く存在しています。より多くの患者さんを救命していくためには、さらなる PAH における病態の理解、そして克服できていない病態への新たな治療が求められています。

近年の肺高血圧症における診断、治療のさまざまな進化に伴い、2022年にはヨーロッパ心臓病学会 / ヨーロッパ呼吸器学会（ESC/ERS）の肺高血圧症診断治療ガイドラインが改訂されました。さらにそれに伴い、国内のさまざまな肺高血圧症ガイドラインの改訂も視野に入っており、現在の、そしてこれからの肺高血圧治療はどうあるべきかを再考する時期にきています。

本企画は、これからの肺高血圧診療を考えながら、現在のベストプラクティスのために役立つ最新の知見を各分野のエキスパートの先生方にご紹介いただき、これからこの分野を目指す先生方にも理解していただけるようにご解説いただきました。本書が皆様に常に活用され肺高血圧症診療と発展の一助となるよう願っています。